

学位論文内容の要旨

		要 旨
学位申請者	中里 理子【論文博士】	<p>本論文は、明治・大正期の小説作品にみられるオノマトペ（擬音語・擬態語）を対象に、語義変化の実態とその変化の要因を明らかにすることを目的としている。</p> <p>明治後期に語義変化したオノマトペ4種類（まじまじ／わくわく／うっとり・うっかり）を対象に、変化の実態を多くの用例から考察し、これらの変化に共通した二つの様相を明らかにしている。ひとつは、隣接類義語間の意味領域の分かち合い、もう一つは多義だった語義の縮小である。たとえば、類義語だった「うっとり」「うっかり」は、漢語の「茫然」や和語の「ぼんやり」と意味領域を分け合い、「うっとり」は「うとうと」の関連からプラスの意味へ、「うっかり」は「うかうか」の関連からマイナスの意味へと意味を縮小した。これらの変化はすべて、意味の範囲を縮小し、語義を明確に限定することで曖昧さを排除している、としている。</p> <p>こうした変化の言語的要因として次の二点を挙げている。第一点は、明治後期に小説で使用される語彙が漢語から和語中心へと移り、俗語であるオノマトペが多用されたことである。明治は書き言葉としての漢語と俗語である和語を並行して使い、漢語に和語の振り仮名をすることで、オノマトペの意味を漢字（漢語）によって表し分けたが、和語が小説の言葉として独立して用いられると、オノマトペも意味の曖昧さを排除して明確にする必要が生じ、語義変化を起こしたと指摘する。第二点は、明治期に目指された文章の近代化として正確で細密な描写が目指されたことである。「泣く」「笑う」を表す描写を見ると、近代に「泣き声」「笑い声」など臨場感を表すオノマトペが工夫される一方、涙の様子、笑い方などは感覚的なオノマトペを用いずに具体的な説明描写がなされている。</p> <p>文章の近代化に伴い、曖昧で多義であった和語のオノマトペは、正確で細密な描写にふさわしく、周辺の語と明確に区別される限定された語義へと変化した、と結論付けている。</p>
論文題目	明治・大正期の小説作品に見るオノマトペの語義変化とその要因 一和語と漢語の関わりを中心に一	
審査委員	(主査) 高崎みどり 教授	
	佐々木泰子 教授	
	大塚常樹 教授	
	伊藤さとみ 准教授	
	野口徹 准教授	